

## 「あれから10年、この先10年」

栃木県立那須拓陽高等学校  
農業経営科 3年 菊地 啓介

両隣りはエステサロンとスーパーマーケット。このような立地条件で私の家は酪農をしています。それ故に問題点も年々生じていますが、父や祖父が一生懸命に酪農をする姿は地域の方々にも理解して頂いており、「この先10年」という目標を掲げて前向きに経営努力を続けています。現在の経営規模は、経産牛30頭、未經産牛12頭に加え、飼料畑5.2haでイタリアンライグラス、裏作としてデントコーンとエンバクを栽培し、全てサイレージ化によって通年自家給与を実施しています。

幼い頃から父が運転するトラクターを見たり、恐怖心よりも先に牛と触れ合っていたこともあり、酪農への興味は兄弟の中でも一番ありました。しかし、365日牛の世話をし、春休みや夏休みには飼料作物の収穫に追われる日々。家族で外出しても日帰りしかしたことはなく、周りの友達に家族旅行の話を開かされる度、両親に「なんで僕だけ行けないの」と、駄々をこねることが多かったようです。「牛のほうが大事なんだ」と、幼かった私にとって自分の家が酪農家というのは大きなコンプレックスとなっていました。

小学3年生になってすぐのことです。真夜中に母に起こされた私は、何も分からないまま牛舎に連れて行かれました。牛舎の入り口に近づくと、牛が苦しそうに鳴く声が聞こえます。中に入ると、まさに分娩の真っ最中でした。「気持ち悪い」そう思った矢先に父からロープを手渡され、言われるがまま分娩介助を行いました。ただ、がむしゃらに引っ張っていると母牛はますます苦しそうに唸ります。「牛の息づかいに合わせるんだ」父からそう言われ、引いては緩め、緩めては引いて、と繰り返しました。それまで味わったことの無いただならぬ緊張感と手汗の量。もう自分が限界だと思った時、無事に子牛が生まれました。濡れた体をタオルで拭いていると、生まれてきてくれたことに感動して涙が止まりませんでした。この体験から、命と向き合って仕事をする酪農は、私の中で「興味」から「使命」へと変わっていったのです。

酪農家になるための第一歩として、栃木県立那須拓陽高校の農業経営科へ進学しました。高校へ入学して間もなく、担任の先生に勧められてホルスタイン共進会に参加しました。先輩たちが毎日手塩にかけて育て上げた牛たちを出品するというので、私はその手伝いをするようになりました。会場に入ると、綺麗に毛刈りされて白く輝く牛たちが並んでいます。審査が始まると、ショーリングをリードマンに引かれ優雅に歩く牛たちに、私は思わず見とれてしまいました。「自分も良い牛を育てて、共進会でリードしてみたい！」胸がドキドキと高鳴ったことを今でも覚えています。

そして忘れもしない2年生の春、一年間共に成長してきた「タクヨウ リー キャシー ダーハム」

---

という牛のリードマンを任せてもらえることになりました。はじめはキャシー ダーハムがEX牛になっていることや、はじめて経産牛を任されたことが不安で、リードマンを務める自信がありませんでした。しかし、出品の2ヶ月前からはほぼ毎日キャシー ダーハムを洗い、調教を行っていくうちに、自分の歩調に自然と合わせるように歩いてくれるようになりました。

そして、大会当日。ベストコンディションとはいえない状態のまま、私とキャシー ダーハムはショーリングへ入りました。審査員が体の隅々まで審査し、序列をつけていきます。「ダーハム、落ち着け。大丈夫」そう心の中でつぶやいて、キャシー ダーハムの顔を見てみると「お前が落ち着けよ」と、目が笑っているように見えました。審査員に誘導されて歩くと、驚いたことに私とキャシー ダーハムは先頭を歩いていたのです。そして、リボンとトロフィーを授与された瞬間、私は夢だった優等賞一席を獲得した実感が湧いてきて、酪農の道を選んで本当に良かったんだと心から思いました。

また、その年の夏には北海道に酪農実習にも参加しました。実習に入った酪農家さんは総飼養頭数約220頭、圃場面積100haと、栃木県では見られない大規模経営を実践されていました。フリーストール・ミルクパラー方式、TMR給与によって飼養管理を徹底しています。また、牧草の収穫作業は4戸共同で自走式フォーレージハーベスターを使うなど、効率的且つ高品質なサイレージ作りをしていました。大規模経営でも「土→草→牛」の循環型酪農を実現していることに驚き、まずは酪農家としての情熱、そして地域との連携があるからこそなんだと勉強になりました。

共進会と北海道実習を通して、飼養管理、牛群改良、循環型酪農など広い視点で学ぶことができました。また、将来自分が実践していきたい経営スタイルが見えてきたように思います。

私が祖父と父の跡を継ぎ、経営を任された時に実践したいこと。その1つ目は牛群検定の実施です。飼養管理、繁殖管理、乳質管理、牛群改良といった生産全般に亘るチェックを行い、適正なボディコンディションを維持します。私は特に繁殖成績の向上を重点にしたいと考えています。繁殖成績が低下すると分娩間隔が延長するため、一生涯で生産できる子牛の数が少なくなるとともに、乾乳期が長くなります。乾乳期が長いと過肥牛になりやすく、胎盤停滞や起立不能、脂肪肝などの発生が多くなり、発情発見率や妊娠率の低下の原因となります。例えば、搾乳期間を11カ月とした場合、空胎期間の目標は115日になりますが、これを超えると1日当たり1500円もの損失になるといわれています。様々な面で経営に悪影響を及ぼすことから、優先的に早期の導入を目指します。

2つ目は施設の更新です。現在、搾乳牛を飼養している牛舎の牛床は短く、飼槽の設計が悪いために飼料効率が1.5を超えることはありません。また、糞尿排出装置が完備されて

---

---

いないために、除糞から運搬までと労働条件は悪く、老朽化も激しいのが現状です。私は「牛にも人にも優しい牛舎」を基本としたタイストール牛舎への更新を目指します。

3つ目は、機械化、自動化などの省力管理技術を導入します。家族人員限定という制約の中で、より生産効率のアップや労働力不足を解決するには、最低でも粗飼料配合自動給餌機、搾乳ユニット自動搬送装置、繋ぎ牛舎用精密飼養管理システムを導入したいと考えています。牛舎管理の省力化に加えて、個体管理の精密化や飼料効果を詳細なデータにおいて自家検証できるので、病気や異常の早期発見にも繋がるはずです。

以上の3つを実現させる上でも最も重要なのが、4つ目の目標である経営規模の拡大です。私は当初、北海道の農家に負けないような100頭規模に拡大しようと考えていました。しかし、理想とは裏腹に大幅な設備投資は当然のことで、それに関わる借入金のことや粗飼料自給率の急速な低下、糞尿処理の深刻化、さらには労働力不足など、実際の経営に関わる諸問題については全く無知だったのです。最近では、父や祖父と今後の収入の見通しについてや乳価の動向についてなどを話し合っています。「10年前を振り返って、10年先を前向きに考える」のだと父は話します。地域の優良酪農家の経営を見学させていただき、そこでも10年先の話を伺いました。するとやはり父と同じで、前向きな回答が返ってきたのです。そうやって今は、自分なりに適正な経営規模を模索しています。現段階では、50頭規模を目指し、長命生産や自給飼料の安定的な確保、循環型酪農の確立が可能となったら、また少しずつ規模拡大をしてもいいのではないかと、具体的なビジョンが浮かんできています。

これらのことを実現するために、今年度は大きな目標がありました。10月に北海道で開かれるはずだった第13回全日本ホルスタイン共進会への出品です。口蹄疫問題によって目標は果たすことはできませんでしたが、今までの努力と経験を無駄にはせずに、いずれは我が家で育てた牛を出品させたいと思います。そして今年は進路実現という戦いもあります。帯広畜産大学に必ず合格して、専門的知識や技術を徹底的に学び、家畜人工授精士の資格も取得したいと思います。

そういえば、酪農の魅力を知った10年前。自宅の周りには田んぼや他の家の牛舎がたくさんありました。今は、住宅街の中に数件の農家が点在しています。酪農と向き合うこれからの10年。私は、健土健民の哲学に沿った循環型酪農を基本に、地域の農業、日本の酪農業に貢献できるような酪農家になりたいと思います。厳しいことも多いだろうけど、牛と共に少しずつゆったりと歩みながら。

---